

特別展示

「日本とポーランドー国交樹立一〇〇周年ー」について

二〇一九（令和元）年は、日本とポーランドの国交樹立一〇〇周年を記念して、両国の交流の歴史を外交史料で振り返る特別展示を開催した（開催期間…二〇一九年一月一六日～二〇二〇年一月三一日）。

一八世紀にロシア、プロシア、オーストリアの三国に分割されたポーランドは、第一次世界大戦が終結した一九一八（大正七）年に独立を回復したが、この翌年の一九一九（大正八）年三月二二日、日本政府がポーランドの独立承認を同国政府に通告したことによって、両国は正式な外交関係を樹立した。しかし、当館が所蔵している記録に見られる両国の交流の歴史は、ポーランドがロシアの支配下にあった日露

記録や条約書、国書・親書、写真アルバム等を展示することによって紹介した（※第二次世界大戦終結以降の時期の展示史料は当館に移管される前の外務本省所管史料）。また、一九九〇年代以降の交流は、写真パネルを展示して紹介した。

観覧者からは、「日本とポーランドの関係は知らないことが多く、勉強になった。来てよかった」という意見や、「ポーランド孤児がっなど両国の縁は大事にしたい」などの感想がみられた。

本特別展示の展示史料解説は以下の通り。また、主な展示史料の画像や解説が、外交史料館ホームページ内のコンテンツ「過去の特別展示・企画展示一覧」にも掲載されている。

○外交史料館HP「過去の特別展示・企画展示一覧」

<http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/honsho/shiryo/archive.html#section3>



戦争の時代（一九〇四年）にまでさかのぼる。本展示では、国交樹立以前の日露戦争時から、一九九四（平成六）年のワレサ大統領の訪日に至るまでの両国の交流の歴史を、外務省

「日本とポーランド―国交樹立一〇〇周年―」〈展示史料解説〉

はじめに

一九一八(大正七)年、第一次世界大戦が終結し、ポーランドは独立を回復しました。そして、翌一九一九(大正八)年三月二二日、日本政府はポーランドを独立国として承認し、外交関係を樹立しました。二〇一九(令和元)年は、日本とポーランドの国交樹立一〇〇周年の節目の年にあたります。

本展示では、親日国として知られるポーランドと日本の交流の歴史を、国交樹立以前の日露戦争時やポーランド孤児のエピソードなども含め、外務省所蔵史料によってご紹介します。

本展示が日本とポーランドの相互理解を促進し、友好関係発展の一助となれば幸いです。

I 日露戦争とポーランド

§ 独立を模索するポーランド

ポーランドは一〇世紀に建国され、一四世紀にヤギェウォ王朝が成立すると欧州の大国として繁栄し、一六世紀には国土が最大となりました。しかし、徐々に国力が低下していき、一八世紀後半には、隣接

していたロシア、プロシア、オーストリアの三国に分割され、一七九五年に地図上から姿を消しました。

しかし、ポーランド人はその後も祖国の独立を目指して、民族の団結を訴え、武装蜂起を繰り返しました。

ポーランド出身の作曲家として有名なショパンは、演奏旅行でウィーンに滞在していた一八三〇年に、ワルシャワでロシアに対する武装蜂起(一月蜂起)が起きたのを知ると、蜂起に参加できない悔しさをワルシャワにいる友人に書き送りました。「革命のエチュード」という名で知られる練習曲作品一〇―一二は、このような時代背景のもと作曲された曲です。

§ 日露戦争とポーランド独立運動

↳ピウスツキ、ドモフスキの来日

一九〇四(明治三七)年に日本とロシアの間で戦争が勃発すると、日本に対するポーランド人の関心が著しく高揚しました。ロシアからの独立を目指して活動していたポーランド社会党は、林董(はやし・ただす)駐英公使を通じて、日本政府に連絡を取りました。

彼らは日本の援助を受けて、ロシア領ポーランドで武装蜂起を起こすことを計画しました。ポーランド社会党の指導者で、後にポーランド建国の父と呼ばれることになる、ユゼフ・ピウスツキは、この計画を実現するために同年七月に日本を訪れ、日本政府関係者に働きかけを行いました。

しかし、武装蜂起が失敗するとみていたポーランド国民民主党のロマン・ドモフスキは、ピウスツキより先んじて同年五月に来日し、武装蜂起の無謀さと有害さを説き、蜂起の援助をしないように日本政府に訴えました。結局、ドモフスキの訴えの影響もあってか、ポーランドでの蜂起は行われませんでした。日本が資金援助を行うかわりに、ロシアの軍事情報等の提供を受ける形で日露戦争中の日本とポーランドの独立運動家は協力関係を持ちました。

【展示史料一】 一九〇四（明治三七）年三月一六日

日本への助勢策に関するポーランド社会党の申し出

林駐英公使から小村寿太郎（こむら・じゅたろう）外務大臣宛の電報です。ポーランド社会党は日本への協力として、①日本軍のためにポーランド人の軍隊を募集する、②満州にいるポーランド兵に革命的書物を配布する、③満州にいるポーランド兵を誘導して日本軍に投降させる、④東部ロシア及びシベリアの鉄道・鉄橋を破壊することを提案しました。左の書き込みから、天皇、総理、陸軍、海軍、山県有朋（やまがた・ありとも）に情報共有されたことが伺えます。

【展示史料二】 一九〇四（明治三七）年七月二〇日

ポーランドの状況に関するドモフスキの意見書

【要約】ポーランドでの蜂起は、日本の利益になるように思うかもしれないが、蜂起は簡単に鎮圧されることが予想される。そうなれば、

ロシアはポーランドに駐留する軍隊を日本へと振り向けることが可能となり、日本にとっても不利益となるだろう。ポーランド国民民主党は武力ではないやり方で、少しずつポーランドを進化させ、独立運動を進めていく方針である。ポーランド人はロシアに対する日本の勝利に非常に感動し、喜んでいる。ポーランド人の利益を損なわない方法で日本の勝利に貢献できれば、これに勝る幸福はない。私は随時、様々な情報を日本に提供することに努めるつもりである。

§ 松山捕虜收容所

日露戦争で戦ったロシア軍の中には、多くのポーランド人兵士が含まれていました。捕虜となったポーランド人兵士は日本の收容所に收容され、日本人と接する機会を持ちました。日露戦争時の捕虜は概して厚遇されましたが、ポーランド人兵士もピウスツキやドモフスキの要請により、ロシア人兵士とは別の施設に收容され、手厚い対応を受けました。

ロシア語を専門としていた川上俊彦（かわかみ・としつね）書記官は、大本営の要請により、愛媛県松山市の捕虜收容所に出張し、敵情などの情報収集のため、ポーランド人兵士の尋問にあたりました。この出張にはドモフスキも同行しており、ポーランド人兵士は喜んで質問に応じたことが大本営への報告書に記されています。

ポーランドは親日国として有名ですが、ポーランドがロシアの支配下にあった時に、日本がロシアと戦って勝利したこと、また捕虜とし

て日本で過ごしたポーランド人が、日本人から親切にされたこと、さらに彼らがそれを帰国後に周囲の人々に語って聞かせたことが、親日国となった理由の一つとも言われています。

展示史料三 一九〇四(明治三七)年七月四日

松山捕虜収容所出張報告書

II 国交樹立

§ ポーランドの独立回復

一九一四(大正三)年、第一次世界大戦の勃発により、一八世紀末にポーランドを分割したロシア(協商国)とドイツ、オーストリア(同盟国)が敵対関係となりました。それぞれの陣営がポーランド人の協力を得ようと、ポーランドの独立に言及するようになり、一九一八(大正七)年一月には、前年に参戦した米国のウィルソン大統領が一四カ条の平和原則において、ポーランドの独立を提言しました。

このような背景の中、ドモフスキは、一九一七(大正六)年八月、独立運動の同志であったイグナツィ・パデレフスキらとフランスでポーランド国民委員会を結成し、独立に向けて各方面に働きかけを行いました。

一方、ピウスツキは、軍隊を組織し、ポーランド独立のため、同盟国側に協力して戦っていましたが、ポーランドの正規軍創設を主張し

た彼の主張が受け入れられず、ドイツ皇帝への忠誠宣誓を拒否したため、投獄されていました。

一九一八(大正七)年一月、ドイツが降伏し、第一次大戦は終結しました。前年のロシア革命で、既に帝政ロシアが倒れていましたが、大戦終結により、ドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国も滅亡し、ポーランドを分割占領していた三つの帝国は全て消滅しました。ここに至り、ポーランドは占領から解放され独立を回復しました。そして、出獄したピウスツキは、独立を求めて数々の戦いに挑んだ英雄として迎えられ、国家元首に就任し、翌年一月には、国民委員会のパデレフスキが総理大臣となりました。

§ 日本とポーランドの国交樹立

一九一九(大正八)年一月、パリ講和会議が始まり、同年二月の会議の席上でポーランド政府に承認を与えることが決定しました。これを受け、日本政府も、ポーランドが独立国としてその形式、実質を備えたことを認め、一九一九(大正八)年三月六日、ポーランドを国家として承認することを閣議決定しました。本決定に従い、同月二日、松井慶四郎(まつい・けいしろう)駐仏大使がドモフスキに国家承認を通告し、日本とポーランドは外交関係を樹立しました。

ドモフスキは、ポーランド国民は日本政府の厚意に永久に感謝すると松井大使に謝意を伝えました。

【展示史料四】 一九一九（大正八）年三月六日

ポーランド国家承認に関する閣議決定書

原敬（はら・たかし）総理大臣や内田康哉（うちだ・やすや）外務大臣、高橋是清（たかはし・これきよ）大蔵大臣の花押が見られます。

§ ヴェルサイユ講和条約の締結

一九一九（大正八）年六月二十八日には、ヴェルサイユ講和条約が調印され、ドイツがポーランド独立を正式に承認しました。また、講和会議では、ポーランドの西部国境について議論されました。ポーランドはポズナン地域と大部分のポモジェ地域が与えられ、直接バルト海へ出られる地域を獲得しました。また、ドイツ住民が多いダンチヒ（ゲダンスク）は、元々ポーランドの港でしたが、自由市として国際連盟の監督下におかれ、関税権はポーランドが持つことになりました。

一九二〇（大正九）年には、ポーランドはソビエト政府と戦争し、翌年リガ条約を締結して、東部国境が定まりました。さらに、住民投票での帰属決定などを経て、一九二三（大正一二）年にポーランドの領域が画定しました。

【展示史料五】 一九一九（大正八）年六月二十八日調印

ポーランド国に関する条約（認証謄本）

講和条約と同日にポーランドと日米英仏伊の五大国との間で結ばれた条約です。ポーランドは出生、国籍、言語、種族、宗教の如何に関

わらず、国内全ての住民の生命、自由につき保護を保障することを国の根本法とする、とされました。

【展示史料六】

ポーランド地図

一九二四（大正一三）年二月二日付で駐日ポーランド公使から送付されてきたポーランドの地図。

§ 初代公使の着任

一九二〇（大正九）年八月、駐日ポーランド公使館が設置され、臨時代理公使としてユゼフ・タルゴフスキが着任しました。そして、翌年九月には、初代駐日公使として、スタニスワフ・パテクが着任しました。パテクは、ワルシャワ大学で法学を修めた後、弁護士として名声を博し、パリ講和会議にポーランド代表団の一員として参列、一九一九（大正八）年二月から翌年六月まで外務大臣を務めた人物です。ポーランドが五大国の一国となった日本を重視したことが伺えます。

一九二二（大正一〇）年九月二十四日、大正天皇が静養中であつたため、パテクは皇太子（後の昭和天皇）へ信任状を捧呈しました。

【展示史料七】 一九二二（大正一〇）年四月二十六日

特命全権公使「スタニスワフ・パテク」に対する信任状

ピウスツキから大正天皇宛国書。

一方、日本側は一九二一(大正一〇)年五月、ワルシヤワに駐ポーランド日本公使館を開設し、川上俊彦が初代駐ポーランド公使として着任しました。

川上は、同年五月一八日に大統領官邸において、ピウスツキに信任状を捧呈しました。川上は、その時の様子を報告書にまとめて、外務大臣宛に送っています。

川上は捧呈式において、「日本はポーランドの独立を非常に歓迎しており、今回公使を派遣することになったのも、両国の友好関係を益々強固に発展させるためである。ポーランドは文明と平和のために大いに貢献することになるでしょう」と述べました。

これに対し、ピウスツキは「日本政府がポーランドの再興を歓迎し、ポーランドが東欧における秩序と進歩の一要素として将来文明に貢献するものとされたことは、非常に嬉しく思います。両国の友好関係が益々強固なものになることは疑いをもちません」とフランス語で述べました。

その後、ピウスツキは川上を別席に招いてロシア語で話しかけました。川上は、ピウスツキが日露戦争で来日した際に、自分が通訳を務めた人物であることに気がつき、「日露戦争当時は、別名を使用しておられたため、当時のポーランドの志士が現在の閣下であるとは想像もできませんでした」と伝えました。すると、ピウスツキは「ロシア政府の警戒が厳重であったため、偽名を使わなくては到底日本には渡れ

なかつたのです」と述べ、懐旧の情に堪えないような表情を見せたと言及されています。

〔展示史料八〕一九二一(大正一〇)年六月二日

川上俊彦初代駐ポーランド公使の信任状捧呈報告書

§ ピウスツキ兄弟と日本

ユゼフ・ピウスツキは、一八六七年、シユラフタ(貴族階級)の家庭に生まれました。若くして独立運動に参加し、流刑や収監を幾度となく経験しながら、独立運動の指導者として頭角を現し、独立後はポーランド軍の総司令官、そして国家元首の地位に就きました。

ピウスツキは大変な親日家でした。彼は日露戦争における日本軍司令官の先駆的な戦略・戦術と全軍の士気の高さを極めて高く評価していました。また、日露戦争で日本がロシア軍を破ったことが、その後の帝政ロシアの崩壊、ひいてはポーランドの独立達成にも寄与したものととして、日本に対して、特別の好意を寄せました。

一九二八(昭和三)年には、日露戦争時に活躍した日本の軍人に対し公式に敬意を表すために、約五〇名に勲章を授与しました。また、日本政府も同年ピウスツキに対し「ポーランド官民中屈指の親日家」であり、日露戦争における対露情報の収集、シベリア出兵時の協力をはじめ、日本の軍事上に及ぼした過去の功績は顕著なものがあるとして、勲一等旭日桐花大綬章を授与しました。

なお、ユゼフ・ピウスツキの兄、ブロニスワフ・ピウスツキは、アイヌ研究者として有名な人物です。ブロニスワフは、ペテルブルク大学在学中にロシア皇帝暗殺未遂事件に関与したとしてサハリン(樺太)に流刑となり、以後一九年間(一八八七—一九〇六)にわたり、日本も含めた極東の地ですごしました。

アイヌの習俗や言語に強くひかれたブロニスワフは、エジソンの蠟管蓄音機を使って、アイヌの肉声を録音するなど、民族学において先駆的な試みを行いました。また、日本語の論文も発表し、一九〇五(明治三八)年から一九〇六(明治三九)年にかけて日本に滞在した際は、二葉亭四迷、大隈重信、横山源之助、孫文らと交遊し、特に親交が深かった二葉亭四迷とは日本・ポーランド協会を設立しています。

アイヌを愛したブロニスワフはアイヌ人女性との間に一男一女をもうけました。二〇一三(平成二五)年に北海道白老町のアイヌ民族博物館にポーランド政府の協力のもと、ブロニスワフの銅像が建てられました。その除幕式には、ブロニスワフの孫の木村和保氏が出席しています。

展示史料九 一九二八(昭和三)年三月一日
ピウスツキ叙勲の推薦書

日本政府は、日本とポーランドの親善関係に貢献したピウスツキに勲一等旭日桐花大綬章を授与しました。本史料は陸軍大臣から外務大臣宛に提出された叙勲の推薦書です。

§ 日本国波蘭国間通商航海条約の締結

一九二二(大正一一)年には、通商条約締結のための交渉が開始され、同年二月七日、ワルシャワにおいて、日本側全権川上俊彦公使、ポーランド側全権ガブリエル・ナルトヴィチ外務大臣及びヘンリク・ストラスブルゲル商工大臣により、日本国波蘭国間通商航海条約が調印されました。本条約は、日本とポーランドが二国間で結んだ初めての条約で、一九二五(大正一四)年一月八日にワルシャワにおいて批准書が交換され、その一〇日後に発効しました。

条約の目的は、両国の友好および協調関係の促進と貿易関係の発展とされ、両国国民に法の遵守を条件として、相手国への入国と滞在の自由を保証しました。さらに、貿易その他の事業、勉学の権利、財産の取得、当該国国民と同等の保護と安全を享受する権利を認めています。通商及び航海は国家の専売事業と沿岸貿易を除き自由の原則に立つとされました。なお、当時、日本は茶と米を、ポーランドは金属、羊毛製品、薬品を輸出していました。

本条約の締結により、両国間の貿易、経済協力や文化交流が拡大する基礎が整えられました。

展示史料一〇 一九二二(大正一一)年二月七日調印
日本国波蘭国間通商航海条約(調印書及び附属議定書)

【展示史料一】 一九二五(大正一四)年一月八日批准書交換

日本国波蘭國間通商航海条約(批准書)

コラム ～ポーランド孤児～

ポーランドが独立する以前、シベリアには、政治犯として流刑になったポーランド人やその子孫など多くのポーランド系住民がいました。彼らは、一九一七(大正六)年にロシア革命が起こると、祖国の独立を目指して戦いましたが、多数の犠牲者を出し、その子供達の多くは孤児となって極寒のシベリアを流浪することとなりました。加えて、一九二〇(大正九)年に、ポーランドがソビエト政府と戦争を開始したことが、これら孤児の救済を更に困難にしました。

一九二〇(大正九)年六月、ポーランド児童救済会のアンナ・ビルケウイチ会長が、日本の外務省を訪れてシベリアのポーランド孤児の惨状を訴え、援助を求めました。外務省は直ちにこの救済事業を日本赤十字社に打診し、同社の快諾を得ました。そして、申し出のあった翌月には、シベリア出兵中の日本軍によって第一次救済活動が開始されました。第一次救済活動では孤児三七五名が、一九二二(大正一一)年の第二次救済活動では三九〇名がシベリアより移送され、日本で手厚く看護された後、ポーランドへと送り届けられました。孤児たちの滞在した宿舎には慰問品を持ち寄る人や、無料で歯科治療や理髪を申し出る人、名勝地の遊覧に招待する人などがあつとを絶たなかった

とされます。また、貞明皇后も行啓し、健やかに育つようにと孤児の頭を撫でたそうです。

孤児たちは、日本を去る時に埠頭で「アリガトウ」を繰り返して、「君が代」を斉唱して感謝の気持ちを表して別れを惜しみました。

彼らは成長後、一九三〇(昭和五)年に「極東青年会」という団体を結成しました。結成当時、駐ポーランド臨時代理公使を務めていた渡辺理恵(わたなべ・りえ)は、一九二〇(大正九)年にはウラジオストク領事として孤児救済に関わった人物で、ここでも彼らの活動を支援しました。青年会は、全国各地に支部ができ、最盛期には約六四〇人の会員がいました。彼らはポーランドの青少年に日本語を教えたり、「桜の夕」という名のパーティを開いて、「両国親善に努めました。彼らが兄のように慕っていた野口芳雄(のぐち・よしお)という外務書記生がいました。野口が日本に戻ることを聞いた青年会の会員たちは、野口をまたポーランドに戻してほしい旨、駐ポーランド日本大使に陳情書を提出しました。両国親善活動の発展は野口の熱心な協力のおかげであり、また、野口は自分たち孤児が敦賀で日本の地を踏んだ際、最初に知遇を受けた日本人の一人であるため、彼に親しみの情を懐いていることが陳情書に記されています。彼らの願いは受け入れられませんが、日本人の温かい心に触れた孤児たちは、帰国後も生涯、日本を愛し、日本とポーランドをつなぐ架け橋になりました。

【展示史料二】 一九二〇(大正九)年一月

ポーランド孤児救済に関する報告書

日本赤十字社が作成した報告書。一九二〇年の第一次救済活動における状況がわかります。

展示史料一三 一九三八（昭和一三）年五月一二日

野口芳雄外務書記生帰国に際しての極東青年会の陳情書

Ⅲ 第二次世界大戦下の日本とポーランド

§ ヴェルサイユ体制の崩壊

一九二九（昭和四）年に世界恐慌が起こると、ポーランドの隣国ドイツでは、深刻な経済混乱に見舞われ、一九三二（昭和七）年には失業者が六〇〇万人に及びました。ドイツ国民は次第にヴェルサイユ条約の破棄やゲルマン民族の人種的優越を説くナチスに支持を寄せるようになり、一九三二（昭和八）年にはヒトラーが首相に就任しました（翌年国家元首に就任）。同年、ドイツは国際連盟を脱退し、一九三五（昭和一〇）年にはヴェルサイユ条約に反して再軍備宣言を行い、一九三六（昭和一一）年には非武装地帯とされていたラインラントに軍隊を進駐させました。

そして、一九三八（昭和一三）年にはオーストリアを併合し、さらにはドイツ人が多く住むチェコスロバキアのズデーテン地方併合を要求しました。これに対し、独英仏伊の首脳は同年ミュンヘン会談を開

き、その要求を認めましたが、一九三九（昭和一四）年三月、ドイツは約束を反故にしてチェコ全土を占領しました。

§ 第二次世界大戦の勃発

ドイツとソ連の間に位置するポーランドは、ピウスツキの方針により、一九三二（昭和七）年にはソ連と、一九三四（昭和九）年にはドイツと不可侵条約を結び、どちらの国とも対立しないような政策をとっていました。しかし、ドイツ系住民が多数を占めるダンチヒ（グダンスク）の返還とポーランド回廊への鉄道・道路の敷設権をドイツが要求してくると、これは断固として受け入れず、ドイツとの関係は日増しに悪化していきました。

一九三九（昭和一四）年五月一三日に酒匂秀一（さこう・しゅういち）駐ポーランド大使は、ポーランド外務省の官房長と会談しました（※一九三七（昭和一二）年一〇月に公使館から大使館に昇格）。酒匂大使は「独ポ両国政府が希望するならば喜んで関係改善の斡旋をするが、駐独日本大使と協議したところ、ドイツの態度に鑑みると、当方からの斡旋の申し出は時宜に適さないという結論になった。ただ、交渉再開について口添えをする程度のことではできるので、ポーランド側に希望があれば、申し出てほしい」と告げました。官房長は日本政府の厚意に謝意を示す一方で、「ドイツがダンチヒをドイツ領にしようとする場合は、ポーランドは武力をもって抗争する覚悟であり、国民は皆そのように考えている」と述べました。

同年八月二三日、ドイツとソ連は不可侵条約を結び、世界を驚かせました。これに対し、同月二五日、ポーランドはイギリスと相互援助条約を結びました。同月二九日、ドイツはポーランドに対し、ポーランド回廊割譲を要求する最後通牒を突きつけましたが、ポーランドがドイツ側の内容説明を待つ間に、ドイツはポーランドが黙殺したと主張、交渉打ち切りを宣言し、九月一日、ドイツ軍はポーランドに侵攻しました。

同日、ユゼフ・ベック外相は酒匂大使と会見し、あくまで抗戦する覚悟を語りました。英仏両国は、ドイツ政府へ即時撤退を要求しましたが、ドイツは応じず、同月三日、英仏両国はドイツに宣戦布告し、第二次世界大戦が始まりました。ドイツは圧倒的な勢いで進攻し、さらに同月一七日、ソ連がドイツとの秘密議定書に基づき、ポーランドに侵攻しました。同月二八日、首都ワルシャワは陥落し、ポーランドは独ソの二カ国に完全に制圧され、分割占領されました。

〔展示史料一四〕 一九三九（昭和一四）年五月一日

ドイツ・ポーランド関係に関するポーランド政府との会談記録
酒匂駐ポーランド大使から有田八郎外務大臣宛の電報。

§ 駐ポーランド日本大使館の引き揚げ

一九三九（昭和一四）年九月五日、駐ポーランド外国公館の緊急避難が始まり、駐ポーランド日本大使館の一部職員や家族は急遽ワル

シャワを離れました。そして、ドイツ軍のワルシャワ総攻撃開始に立ち、同月二一日、ポーランド人管理人を残して館員全部の引き揚げを行いました。

酒匂大使はポーランド政府と共にルーマニアに逃れた後、ドイツに渡り、ドイツ政府の許可を得て、一月一日、ドイツ軍占領下のワルシャワに戻りました。後日、酒匂大使は「七分通り破壊された街の中に無事な日本大使館を見出したときは万感交々、無事といつても入口には砲弾の大穴があき、内部はタイプライターが一間半も飛んでゐる有様で、残つてゐた使用人達は私の顔を見て泣き出した」、そして一月一七日「館内の黒板に『感多くして去り難し 時少うして躊躇ふを許さず』と大書して大使館を引揚げた、それが最後でした、あの大使館をめぐつて思出はいくらでもある：まことに感慨無量です」と語りました（朝日新聞一九四一（昭和一六）年一〇月五日記事）。

§ 大使館の閉鎖

ポーランドの占領後、日本政府は、英仏両国の対独軍事行動が継続中の現状では、国際法上の征服とは認められない、という法理論から、ポーランドは未だ消滅していない、との見解をとり、パリで樹立された亡命政府を継承政府と認定しました。

しかしその後、ドイツは西部戦線でも大攻勢に出て、一九四〇（昭和一五）年六月にパリを占領すると、日本は同年九月、日独伊三国同盟を結びました（パリのポーランド亡命政府は、ロンドンへ移動）。

一九四一（昭和一六）年一月には、ポーランド共和国の消滅を認めるよう、ドイツ側から日本側に通告がありました。日本は三国同盟で、欧州の新秩序建設に関するドイツ・イタリアの指導権を認めていたため、ドイツの申し出を受け、一九四一（昭和一六）年一〇月四日、駐日ポーランド大使館と駐ワルシャワ日本大使館の閉鎖を発表しました。

同日、天羽英二（あもう・えいじ）外務次官は、タデウシユ・ロメル駐日ポーランド大使に上記決定を通告しました。

天羽次官は「両国は常に友好関係を持続してきましたが、戦争によって異常な状態に置かれることはやむを得ないものです。ただ、日本政府及び国民は、ポーランド国民に対して終始同情的ですから、出来るだけ便宜を図ることとします。私も今日の通告は最も苦痛とするところです」と述べました。ロメル大使は本決定に抗議しながら、「自分も非常に残念に思います」と述べて辞去しました。

そして、この日から約二ヶ月後の一九四一年二月八日、日本の真珠湾攻撃により、太平洋戦争が勃発しました。同月一日、ポーランドは、米英とともに日本に宣戦布告し、これにより、両国の国交は断絶しました。

【ポーランドにおける戦争被害】

占領下のポーランドでは多くの人々が犠牲になりました。ナチスはスラブ民族の奴隷化を目指し、ポーランド人の指導層を殺害し、資産

を剥奪し、初等教育以上の教育を受けることを禁じて強制労働に従事させました。また、ユダヤ人には絶滅政策を取り、アウシュビッツなど各地の収容所に移送し、殺害しました。ソ連もポーランド人指導層の殺害や、占領地域住民の辺境への追放などを行い、多数の犠牲者が出ました。

また、絶望的な生活の中、自由・独立を求めて決行されたワルシャワ蜂起では約二〇万人の市民が亡くなっています。

第二次世界大戦におけるポーランドの犠牲者は、総人口の五分の一（世界最高の比率）にのぼるとされます。

展示史料一五 一九四一（昭和一六）年五月二八日
駐ポーランド日本大使館廃止に関する上奏案

展示史料一六 一九四一（昭和一六）年一〇月六日作成
天羽外務次官・ロメル駐日ポーランド大使会谈記録

IV 国交回復と戦後の交流

§ 第二次世界大戦の終結と戦争による体制変化

一九四一（昭和一六）年六月にドイツがソ連に侵攻し、独ソ戦が始まると、ソ連は連合国側に立って参戦しました。そして、一九四五（昭和二〇）年一月、ポーランドの首都ワルシャワはソ連軍によって、ド

イットの占領支配から解放されました(同年五月七日、ドイツは無条件降伏)。

そのため、同年二月の米英ソ首脳によるヤルタ会談及び同年七月から八月に行われたポツダム会談において取り決められた戦後のポーランドの領土は、ソ連の主張を反映したものになりました。

ポーランドは、東方において一八万km²をソ連に割譲し、西方において一〇万三〇〇km²をドイツから獲得しました。また、戦争による破壊と大幅な領土変動は住民の大移動を引き起こし、人口は一九三八(昭和一三)年の三四八万人から一九四六(昭和二一)年には二三九三万人に激減し(約三〇%減)、かつての多民族国家は、限りなく単一民族国家に近いものに生まれ変わりました。

国内政治はソ連の影響下におかれ、一九四八(昭和二三)年以降、ポーランド統一労働者党(PZPR)の一党支配体制が確立されました。新生ポーランドは、戦前のポーランドとは著しく異なるものになりました。

§ 国交回復と通商条約の締結

一九五一(昭和二六)年九月八日、サンフランシスコ平和条約が調印され、日本は国際社会に復帰しました。しかし、ソ連の影響下にあったポーランドは本条約に調印しなかったため、日本との国交は断絶したままでした。

その後、一九五四(昭和二九)年二月、駐仏ポーランド大使から、

国交調整に関する申し出がありました。日本政府は慎重な態度を取り、積極的には動きませんでした。

一九五六(昭和三一)年一月一九日、日ソ共同宣言が調印されると、同月二二日、ポーランドの国連代表は、国連日本政府代表部加瀬俊一(かせ・としかず)大使に面会し、日ソ交渉の妥結につき祝意を述べた後、ポーランドとの国交回復につき、再度申入れを行いました。そして、同年二月の日本の国際連合への加盟の後、国交回復の協議が本格化し、翌一九五七(昭和三二)年二月八日、ニューヨークにおいて日本側全権加瀬俊一大使、ポーランド側全権ヨゼフ・ヴィネヴィチ外務次官により、「日本国とポーランド人民共和国との間の国交回復に関する協定」が調印されました。本協定は同年五月一八日に発効し、これにより、日本とポーランド間の戦争状態は終了し、外交関係が回復しました。東欧諸国との間では、最も早い国交回復でした。

同年、両国の大使館も再開し、翌一九五八(昭和三三)年四月二六日には、「日本国とポーランド人民共和国との間の通商に関する条約」が調印され、翌年一月一六日に発効しました。

こうして、一九五〇年代後半には、戦争により断絶した日本とポーランドの外交関係は正常化しました。しかし、東西冷戦の影響もあり、ポーランドが民主化されるまでの期間、両国の交流は低調なままでした。

〔展示史料一七〕

一九五七(昭和三二)年二月八日調印

日本国とポーランド人民共和国との間の国交回復に関する協定(調印書)

【展示史料一八】

一九五八(昭和三三)年四月二六日調印

一九五九(昭和三四)年一月一六日批准書交換

日本国とポーランド人民共和国との間の通商に関する条約(批准書)

§ 「連帯」運動とポーランドの民主化

一九八〇(昭和五五)年八月、グダンスクの造船所で労働者が工場を占拠し、ストライキが始まりました。物不足とインフレ、情報統制など労働者の不満が高まる中、ストはポーランド全土に及び、同月三十一日、政府と労働者との間でグダンスク協定が結ばれました。協定において、労働者側はポーランド統一労働者党(PZPR)の支配から独立した自由な労働組合の設立やスト権が認められました。この協定は、社会の全てをPZPRが支配するという一党独裁体制に風穴を開けた、社会主義の歴史上、画期的なものでした。

この協定に基づき設立された自主独立労働組合「連帯」は急速に勢力を拡大し、たちまち九五〇万の組合員を獲得しました。それに反比例して、PZPRの権威は失墜していきました。ソ連はこの状況に対し、軍事介入をほのめかしました。そして、一九八一(昭和五六)年二月、ポーランド政府は戒厳令を布告し、「連帯」幹部を拘束して「連帯」を活動停止としました。

この状況が変わったのは、ソ連でゴルバチョフ政権が誕生した一九

八〇年代半ば以降でした。一九八六(昭和六一)年六月、ポーランド政府は全政治犯の恩赦を実施し、その後も、国民の参政権の拡大、憲法裁判所、オンブズマン制度の導入、結社の自由承認など大胆な措置が次々に実施されました。

そして、一九八九(平成元)年二月には、PZPR改革派と「連帯」穏健派による「円卓会議」が開かれました。円卓会議とは、参加者の間に上下関係がないこと、つまりPZPRの国家における指導的役割が否定されたことを意味しました。「連帯」市民委員会は同年六月の自由選挙で圧勝し、政権を獲得しました。こうして、ポーランド人は流血を見ることなく、自力で民主化を成し遂げました。これは、社会主義国では初めての出来事であり、その後の東欧諸国に多くの影響を与えました。

また、翌一九九〇(平成二)年一月、海部俊樹(かいふ・としき)総理がポーランドを訪問し経済援助を発表するなど、日本との関係もこの後、大きく進展しました。

§ 日本美術技術博物館 (Manggha) の設立

ポーランドを代表する映画監督アンジェイ・ワイダ氏は、ドイツ占領下で民族的文化活動が禁じられていた一九四四(昭和一九)年、クラクフの美術展で目にした日本の浮世絵に強い衝撃と深い感銘を受けました。ワイダ氏にとって「人生における、真の芸術との最初の出会いは」でした。この浮世絵は、自らの生涯と財産を日本美術の収集に捧

げたフェリクス・ヤシエンスキというポーランド人のコレクションの一部でした。コレクションの中の日本美術品は約六五〇〇点に及びます。多くの人に本物の芸術に触れてほしいと考えていたヤシエンスキは、このコレクションを保存し展示する美術館建設を夢見て、コレクションをクラクフ国立博物館に寄贈しましたが、美術館の設立はなかなか実現しませんでした。

ワイダ監督は、若き日に受けた感動が忘れられず、ヤシエンスキの宿願であった美術館建設を実現したいと長年考えていました。そして、一九八七（昭和六二）年、日本での「京都賞」受賞をきっかけに、その賞金全額を寄贈して、ヤシエンスキの夢の実現を提唱しました。これに賛同した両国の多くの人々の協力のもと、一九九四（平成六）年一月、クラクフに日本美術技術博物館が開館しました。一三万人を超える日本人からの募金協力のほか、建築家の磯崎新氏が博物館施設を無償で設計し、画家の平山郁夫氏が一点一点作品の点検作業を行い、今後の保存・展示に指針を与えるなど、様々な方面から支援がありました。

多くの人の夢が結実した日本美術技術博物館では、日本美術の展示の他、日本関連の様々な企画展示・催しが行われ、現在、両国の文化交流の拠点となっています。

§ ワレサ大統領の訪日

一九九四（平成六）年一二月には、レフ・ワレサ大統領が国賓とし

て日本を訪れました。ワレサ大統領は、「連帯」運動の指導者で、ポーランドに民主化をもたらした人物です。一九八三（昭和五八）年にノーベル平和賞を受賞しています。

一九四三（昭和一八）年に農家の家庭に生まれ、一九六七（昭和四二）年からクダンスクの造船所で電気工として働いていたワレサは、一九八〇（昭和五五）年のストライキの際に労働者側のリーダーとして政府との交渉にあたり、その後、「連帯」の委員長に就任しました。一九八一（昭和五六）年の戒厳令の際に拘束されましたが、信念を曲げず、一九八九（平成元）年の自由選挙で「連帯」を圧勝に導き、一九九〇（平成二）年に大統領に就任しました。

ワレサは「連帯」運動を始めた時、最初の外国訪問先として自ら日本を選び、一九八一（昭和五六）年に来日しています。そして、初めて見る日本に感動し、帰国後に「ポーランドを第二の日本にしよう」と提唱するなど、日本に対して強い関心を寄せていました。

一九九四（平成六）年の来日は、四日間の短いものですが、この間に、政財界の要人との懇談や、明治神宮への訪問など精力的に活動しました。

天皇陛下（現在の上皇陛下）は、一二月七日に催された宮中晩餐におけるお言葉の中で、ワレサ大統領に対し「大統領閣下には、不屈の信念と対話の努力により、激動の時代に国民に希望を与え、閣下により指導された「連帯」の運動は、ポーランドに民主化をもたらしたのみでなく、中・東欧の変革へとつながりました。閣下並びに貴国民が

今日の世界に果たした役割は、誠に大きなものであったと思います。貴国の人々が過去の歴史の流れの中で、常に抱き続けていた自由と独立への思いを考え合わせ、深い感慨を覚えます」と述べられています。

展示史料一九 一九九四（平成六）年一二月
ワレサ大統領訪日記念アルバム

§ 阪神・淡路大震災被災児童の招待

一九九五（平成七）年一月一七日、阪神・淡路大震災が起きました。これにより、六〇〇人以上の人々が命を落としました。駐日ポーランド大使館は、シベリアでの孤児救済の恩返しとして、震災で親を亡くした被災児童をポーランドに招き、心のこもったもてなしで、児童の受けた傷を癒やすことを企画しました。こうして、同年夏に、二〇余名の被災児童がポーランドに招待されました。児童は、クラクフなどの歴史ある緑豊かな地方都市で、ポーランドの人々と交流し、素晴らしい夏休みを過ごしました。

翌年、二回目の被災児童の招待があった際には、帰国前に開かれたお別れパーティに、かつてシベリアで保護された四名の孤児が招かれました。孤児たちは、困難な時代の中で大切に保管してきた日本での写真や、日本人にもらった桐の小箱を児童に見せながら、日本人から受けた親切、厚意を児童に語りました。パーティの最後には孤児たちから、児童一人一人に一輪のバラの花が手渡され、招待された人々か

ら大きな拍手が起きました。

むすびにかえて

以上、日露戦争から一九九〇年代までの日本とポーランドの交流の歴史を見てきました。その後、二〇〇二（平成一四）年の天皇后陛下（現在のの上皇皇后陛下）のポーランド御訪問や、二〇一一（平成二三）年の東日本大震災被災児童のポーランド招待などがあり、両国の絆はより一層深まりました。

一〇〇年を超える両国の交流の歴史において、第二次世界大戦や、東西冷戦などにより、両国の交流が途絶えた時期もありました。しかし、そうした時期でも、日露戦争で捕虜になったポーランド人や、シベリアから助け出された孤児、またドイツ占領下で目にした浮世絵に深い感銘を受けたワイダ監督など、辛く悲しい時に日本人の温かい心や素晴らしい文化に触れたポーランドの人々は、日本への親愛の情を抱き続けました。そして、彼らは日本人から受け取ったものを、ポーランドでの日本文化普及や、震災の際の被災児童の招待という形で、日本人に返してくれました。

日本とポーランドの交流の歴史はそうした、人と人の温かい心の交流の積み重ねの上に出てくると感じられます。

日本とポーランドは地理的には遠く離れていますが、親愛の情により、強く結びついています。本展示をご覧いただくことで、ポーランド

に対する理解が深まり、両国民の友情、交流が一層深まるきっかけとなれば幸いです。

主要参考文献

〈図書等〉

- 伊東孝之ほか『社会主義の二〇世紀・NHKスペシャル』第三卷(日本放送出版協会、一九九〇年)
- 伊東孝之ほか編『ポーランド・ウクライナ・バルト史』(山川出版社、一九九八年)
- 阪東宏『ポーランド人と日露戦争』(青木書店、一九九五年)
- 阪東宏『世界のなかの日本・ポーランド関係一九三二―一九四五』(大月書店、二〇〇四年)
- 兵藤長雄『善意の架け橋』(文藝春秋、一九九八年)
- 宮脇昇『ロシア兵捕虜が歩いたマツヤマ』(愛媛新聞社、二〇〇五年)
- 山田邦紀『ポーランド孤児・「桜咲く国」が見つないだ七六五人の命』(現代書館、二〇一一年)
- 渡辺克義『物語ポーランドの歴史』(中央公論新社、二〇一七年)
- イエジ・ルコフスキほか『ポーランドの歴史』(創土社、二〇〇七年)
- エヴァ・パワシユェルトコフスカ、アンジェイ・T・ロメル『日本・ポーランド関係史』(彩流社、二〇〇九年)
- 『新訂増補東欧を知る事典』(平凡社、二〇〇一年)
- 木村和保『謝辞』(『ポーランドのアイヌ研究者 ピウスツキの仕事』白老における記念碑の除幕に寄せて)『研究会報告集』北海道ポーランド文化協会、北海道大学スラブ研究センター、二〇一三年)
- (<http://hdl.handle.net/2115/53543>)

ポーランド広報文化センターHP (<https://instytut-polski.org/>)

ポーランド政府観光局HP (<https://www.poland.travel/ja>)

「主な式典におけるおことば(平成六年)」(宮内庁HP)

(<http://www.kunaicho.go.jp/okotoba/01/okotoba/okotoba-h06c.html>)

日本ポーランド国交樹立一〇〇周年(在ポーランド日本国大使館HP)

(https://www.plemb-japan.go.jp/100/index_j.html)

日本美術技術博物館設立二〇周年(在ポーランド日本国大使館HP)

(https://www.plemb-japan.go.jp/managha/index_j.html)

ポーランド基礎データ(外務省HP)

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/poland/data.html>)

わかる一国際情勢 ポーランドという国(外務省HP)

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol22/>)

〈外務省記録・戦後外交記録〉

14.317 「欧州戦争関係波蘭問題一件」

52.819 「俘虜取調ノ為メ陸軍省ノ依頼ニ応シ川上書記官松山へ出張一件」

52.15.13 「日露戦役ノ際ニ於ケル芬蘭人及波蘭人ノ態度関係雑纂」

61.5.8.20 「各国駐劄帝国公使任免雑件 波蘭国ノ部」

61.8.4.30 「在本邦各国公使任免雑件 波蘭国ノ部」

63.1.8.13 「変災及救済関係雑件 波蘭孤児救済方ノ件」

7.2.5.12 「各地地図」

A.2.20.G/PO1 「独乙、波蘭間外交関係雑纂(「コリドール」問題ヲ含ム)」

J.2.30.J/X2.6 「外国人ニ対スル在外公館発給旅券査証報告一件 欧州ノ部」第二卷

L.2.22.1.15 「外国人叙勲雑件 波蘭国人ノ部」

M1.301.4

「在外帝国公館関係雑件（在満、支公館ヲ除ク）（旧華族会館樓門在米 大使館へ移築ニ関スル件ヲ含ム）閉鎖関係」

第二卷

M1.503.30

「在本邦各国公館関係雑件 波蘭国ノ部」

I1.100.4

「各国少年団及青年団関係雑件」第二卷

A1.335-1

「日本・ポーランド間外交関係雑集 国交回復交渉関係」第一卷 (MF NO. A.0133)

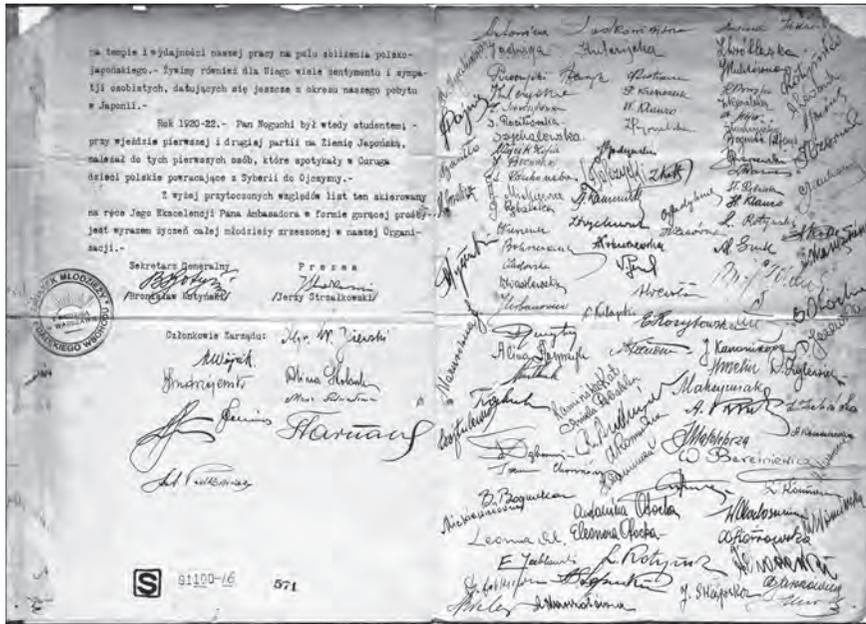
協力機関

駐日ポーランド共和国大使館

ポーランド広報文化センター

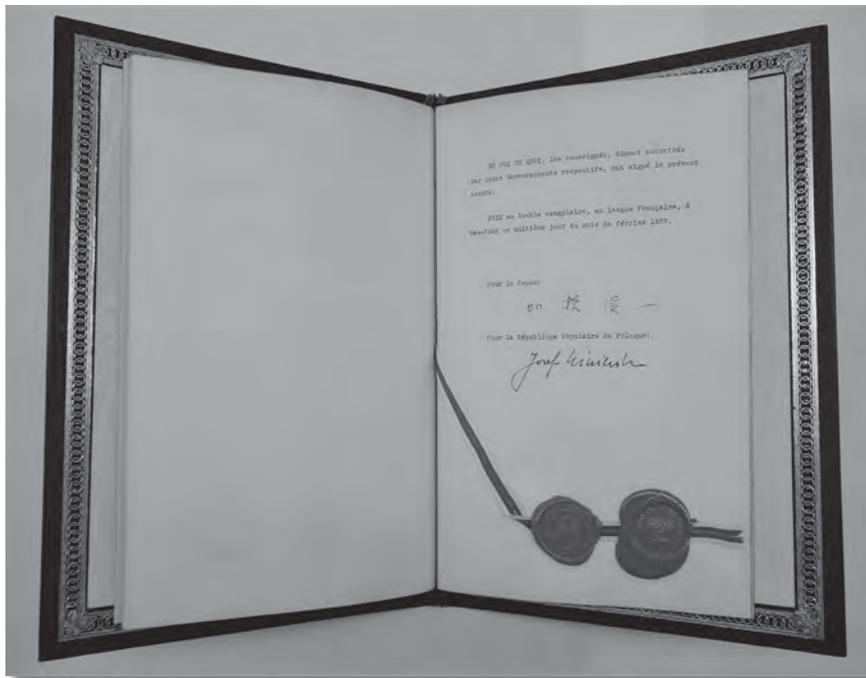
展示史料一三

野口芳雄外務書記生帰国に際しての極東青年会の陳情書



展示史料一七

日本国とポーランド人民共和国との間の国交回復に関する協定(調印書)



展示史料一九

ワレサ大統領訪日記念アルバムより



一九九四(平成六)年一二月七日
歓迎行事(迎賓館赤坂離宮)



一九九四(平成六)年一二月七日
村山富市(むらやま・とみいち)総理大臣との会談(迎賓館赤坂離宮)

日本・ポーランド交流史年表

和暦	西暦	日本・ポーランド関係	ポーランド国内	日本国内、一般事項等	
明治	37	1904 日露戦争勃発 ドモフスキ、ピウスツキ来日			
	3	1914		第一次世界大戦(～1918)	
大正	6	1917		ロシア革命	
	7	1918	独立回復 ピウスツキが国家元首に就任	シベリア出兵(～22)	
	8	1919	日本がポーランドを国家承認 (国交樹立)		ヴェルサイユ講和条約締結
	9	1920	ポーランド孤児救済 駐日ポーランド公使館開設	ポーランド・ソビエト戦争(～1921)	国際連盟成立
	10	1921	駐ポーランド日本公使館開設	三月憲法採択。リガ条約締結	
	11	1922	日本国波蘭国間通商航海条約調印		
	12	1923		領土画定	
	3	1928	ポーランドが日本軍人に勲章授与 日本がピウスツキに勲章授与		
	6	1931			満州事変
	7	1932		ソ連と不可侵条約締結	満州国成立
8	1933			日本、国際連盟脱退	
9	1934		ドイツと不可侵条約締結		
11	1936			日独防共協定締結	
12	1937	日・ポ公使館を大使館に昇格			
13	1938		ドイツがダンチヒ(グダンスク)とポーランド回廊での特権を要求		
14	1939		英国と相互援助条約締結 ドイツ軍侵攻(第二次世界大戦) ソ連軍侵攻。ポーランド分割占領。パリ亡命政府成立	独ソ不可侵条約締結 第二次世界大戦(～45)	
昭和	15	1940	亡命政府、ロンドンへ移る	日独伊三国同盟締結	
	16	1941	駐ポーランド日本大使館、駐日ポーランド大使館閉鎖 ポーランド、日本に宣戦布告	独ソ開戦。ドイツ、旧ポーランド全域を占領。亡命政府、ソ連と国交回復協定締結	太平洋戦争(～45)
	18	1943		カティンの森事件。シコルスキ首相飛行機事故により死去	
	19	1944		ワルシャワ蜂起	
	20	1945		ソ連軍により解放	
					ポツダム宣言受諾 降伏文書調印 国際連合成立

和暦	西暦	日本・ポーランド関係	ポーランド国内	日本国内、一般事項等	
昭和	23	1948	ポーランド統一労働者党による一党支配体制の成立		
	24	1949	コメコンに加盟		
	26	1951		サンフランシスコ平和条約調印	
	27	1952	ポーランド人民共和国憲法採択	サンフランシスコ平和条約発効	
	30	1955	ワルシャワ条約機構設立		
	31	1956		日ソ共同宣言調印 日本、国際連合加盟	
	32	1957	日本国とポーランド人民共和国との間の国交回復に関する協定調印		
	33	1958	日本国とポーランド人民共和国との間の通商に関する条約調印		
	53	1978	日本国とポーランド人民共和国との間の通商及び航海に関する条約調印		
	55	1980		独立自主労組「連帯」発足	
58	1983		フレサ委員長、ノーベル平和賞受賞		
62	1987	中曽根総理、ポーランド訪問 ヤルゼルスキ国家評議会議長訪日			
平成	1	1989	選挙で「連帯」が圧勝し政権獲得 国名をポーランド共和国とする	冷戦の終結(マルタ会談)	
	2	1990	海部総理、ポーランド訪問	フレサ大統領就任	
	3	1991		ワルシャワ条約機構解体	湾岸戦争、ソ連邦解体
	6	1994	日本美術・技術博物館開設 フレサ大統領訪日		
	7	1995	阪神・淡路大震災被災児童のポーランド招待(1996年も実施)		阪神・淡路大震災
	11	1999		NATO加盟	
	14	2002	天皇后両陛下、ポーランド御訪問		
	15	2003	小泉総理、ポーランド訪問		
	16	2004		EU加盟	
	20	2008	カチンスキ大統領訪日		
	23	2011	東日本大震災被災児童のポーランド招待		東日本大震災
	25	2013	安倍総理、ポーランド訪問		
	27	2015	コモロフスキ大統領訪日		
	30	2018	河野外相、ポーランド訪問		
	令和	1	2019	日本・ポーランド国交樹立100周年 秋篠宮皇嗣同妃両殿下、ポーランド御訪問	